平成27年度　佐賀市立小中一貫校北山校　学校評価結果

1　学校教育目標	2　本年度の重点目標
絆・全力・挑戦 ～小中一貫教育のメリットを生かした 活力ある児童生徒の育成～	①　絆づくり ・　支持的風土づくり　人と関わる力　自己肯定感 ②　学力向上 ・　言語活動の充実　論理的思考力　自学ノート ③　地域連携 ・　ふるさとへの誇り　コミュニティセンター機能

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

達成度
A：ほぼ達成できた
B：概ね達成できた
C：やや不十分である
D：不十分である

3　目標・評価

①絆づくり　・支持的風土づくり　人と関わる力　自己肯定感

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策
学校運営	○学校教育目標	本年度の重点目標の周知	・新しい学校教育目標及び重点目標について児童生徒、保護者の認知度を90%以上にする。	・育友会総会、学級育友会,全校集会などにおいて、保護者、児童生徒に具体的取り組みを上げながら説明する。 ・学校便り、学級便り,HP、ブログなどを通して、取組を地域へ発信していく。	A	・学校教育目標を「絆・全力・挑戦」とキーワードを繋げ、分かりやすく、覚えやすいように工夫をした。保護者には育友会総会での説明、各学校・学級便りでの周知を試みた結果、周知度87.3%とH26年度比＋7.5%と上昇した。児童生徒も周知度89.8%と高かった。	・学校教育目標を全職員に周知徹底し、日々の教育活動の中で、意識し実践していく。児童生徒も児童生徒会活動の中で、学校教育目標を意識した活動に繋がるように指導助言をする。 ・保護者には育友会総会、学級育友会、各学校便り等を活用して、周知徹底できるよう伝え、協力を得られるようにする。
教育活動	○生徒指導	あいさつ、返事、 言葉遣い、掃除指導の徹底 いじめ問題への対応	・「児童生徒は、友達や先生・地域の方々へのあいさつ、返事、言葉遣いがきちんとできている」と回答する保護者・教職員・児童生徒を90%以上にする。 ・思いやりのある人間関係を作り、いじめのない学校を目指す。	・「あいさつ、返事、言葉遣い」についての指導を、年度初めに全校集会、学級指導を通し徹底する。また、年間通して全校集会の際に「あいさつ、返事、言葉遣い」についてふれ、意識の継続を促す。 ・言葉遣いについては、道徳、人権・同和教育とも関連させながら継続した指導を行っていく。 ・いじめアンケートを定期的にとり、また日常の細かな観察を併せ、早期発見、早期対応をしていく。	B	・アンケート項目「あいさつ・返事」項目の4段階表評価では、「きちんとできている」と「だいたいできている」を合わせると児童生徒は96.7%、保護者の評価は73.7%であった。地域であいさつをよくする児童生徒の声をよく聞くが、保護者は挨拶をもっとしてほしいと考えている。 ・同様に「言葉遣いがきちんとできている」項目評価では、児童生徒は88.5%、保護者の評価は73.8%であった。 ・「いじめのない支持的風土づくり」項目評価は児童生徒が86.7%、保護者が98.4%、教職員100%であった。	・来年度も年間を通して継続的に「あいさつ、返事、言葉遣い」そして「立腰」の指導を行い児童生徒の意識を持続させていきたい。児童生徒会では毎月の「あいさつ運動」の取組、道徳の授業や学級活動の時間を使って「挨拶の大切さ」を考えさせていきたい。また、地域の方々には通学時の立番指導での挨拶啓発をお願いし、「挨拶溢れる北山」にしていく。 ・月初の「いじめ・命を考える日」では「みんな仲良し宣言」を全校児童生徒で唱和したり、各月の学年発表では全校みんなで「人権」について考えたりすることを通して、「いじめのない学校・命を大切にする学校」をめざす。
	●心の教育	道徳教育の充実	・道徳の時間を要に、各教科、特別活動、学校行事など教育活動全体を通じて、児童生徒の豊かな心作りに取り組む。	・児童の実態に合わせて重点目標を設定し、各教科、特別活動、学校行事などと関連させながら総合的に指導を行っていく。 ・ふれ合い道徳の授業を全クラスで公開し、家庭や地域の方々に学校の取り組みを知ってもらうと共に、家庭、地域との連携を図る。	B	・各学年、年間計画をもとに道徳の授業を実施することができた。また、各教科や特別活動、学校行事等とも関連を図りながら道徳の授業を計画的に実施した学年もあった。 ・ふれあい道徳の授業公開は、全クラスで実施することができた。保護者や地域の方々に学校での取り組みを知ってもらうことができた。	・道徳の教科化に向けて、職員研修を実施する。 ・「私たちの道徳」を取り入れた、年間指導計画の見直しと修正を行う。 ・道徳の時間を要として、各教科や特別活動、学校行事などと関連を図りながら総合的に指導を進めていくために、各学年の「別葉」の加除修正を行う。
		人権・同和教育の充実	・職員アンケートにおける人権・同和教育の充実について、「よくできた」の割合80%以上にする。	・人権集会や平和集会、人権作文や標語、全校でのぽかぽかの木の取り組み等で児童生徒の人権意識を高める場を設定する。 ・月に一回、いじめいのちを考える日として、集会を行う。 ・人権週間期間中、中学生を対象に職員が人権に関する話を朝会時に行い、人権への意識をさらに高める。	B	・「人権」について考えさせるため、12月上旬に全校人権集会を行った。 ・ぽかぽかの木の取組では、異学年交流を活かしながら、相手を思いやる心や善行を見つける目を意識させた。 ・4段階評価「いじめのない支持的風土づくり」の取組に関する職員アンケートでは、「よくできた」「だいたいできた」合わせて100%であった。 ・中学部では人権集会後、職員からの話とGWTを3学年が一緒に行ったことで、人権に対する感覚をさらに高めるようにした。	・次年度は北山校の児童生徒全員の人権意識を育てるために年間を見通し実態に応じた人権教育計画を立てる。 ・子どもたちの課題を全職員で把握し共通理解を図り、その実態に照らし合わせて、全職員が同じ方向を向いて子どもたちの心が育つような人権学習を積み重ねていく。 ・部落問題に関する職員研修を行い、差別事象に対しては一丸となって組織的対応を行う。

	○人と関わる力の育成	支持的風土づくり (自己肯定感)	・「毎日、学校で楽しく過ごしている。」「友達、下級生に対して思いやりの心をもって接している。」と回答する児童生徒の割合を3.6以上にする。	・帰りの会で、「今日のスマイル」(お互いの良いところ)を発表し合い、自己肯定感を高めさせる。 ・子ども支援会議で生活実態アンケート「友達の良かったところ」を共有し、全職員で児童生徒を褒めて育てる。	B	・各学級ごとに帰りの会で、「今日のスマイル」(お互いの良いところ)を発表し合い、自己肯定感を高めさせる活動を行った。 ・「学校が楽しい」と回答する児童生徒の割合は81.3%であったが、「友達や下級生に対して思いやりの心をもって接している。」と回答する児童生徒の割合は90.3%であった。	・次年度も継続して各学級ごとに帰りの会で、「今日のスマイル」(お互いの良いところ)を発表し合い、自己肯定感を高めさせる活動を行う。 ・道徳や学級活動の時間を使って、思いやりの心を育む授業を行う。
		交流学習の充実 (直接交流・遠隔地交流)	・国内外の遠隔地交流や中・大規模校との直接交流学習を通して、自己表現する力、対話する力、共感する力、協調性を高め、友だちの良さや特徴に気づかせる。 ・遠隔地交流学習を通して、伝える力、対話する力、共感する力を高める。	・佐賀市内または近隣の学校との直接交流学習を実施し、初めて会う人や年に数回会う人と接し、コミュニケーション力を高める。 ・県外または外国との遠隔地交流学習を実施し、テレビ会議システムなどの情報伝達媒体を介して、間接コミュニケーションのスキルを高める。	A	・小川小とのテレビ会議システムでの交流では、3．4年社会の郷土学習、5，6年国語科、中期総合の合同授業、スピーチ集会に参加など、ねらいをより明確にした活動ができた。 ・中学部は大和中と交流、小学部は東部小と学期に1回と合同バス旅行を実施した。 ・小学部は豪州リズモア校と、中学部は豪州シェパトン校との交流授業を年に3回実施することができた。互いに自分たちの国、学校、考えなどを表現し、対話する力を向上させることができた。 ・教職員アンケートでは100%質疑応答力がつく指導を工夫したと答えており、児童生徒の78%が向上を実感している。	・小川小中学校とは、回数を重ねたことで、互いに距離を縮めることができた。しかし、継続のためには、使用教科書の違いや校時の調整が必要となり、綿密な計画が求められる。 ・海外との遠隔地交流では、内容に関しては課題はないが、システムの整備が確実に必要である。

②学力向上　・言語活動の充実　論理的思考力　自学ノート

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●学力向上	基礎・基本の定着	・国及び県の学力･学習状況調査の正答率を県平均以上にする。 ・標準学力検査CRTの個々の正答率の3ポイント向上を目指す。	・NRT、国及び県の調査結果を分析し個々のつまづきを明確にして、学習個人カルテを作成し活用しながら、授業、朝自習、友愛の中での補充学習を行う。 ・家庭と連携し、「家庭学習の手引き」を活用させ、自分の苦手分野などを自主的に家庭学習できるようにする。	A	・4月調査、12月調査とも、全学年で全教科で県平均を上回ることができた。 ・小学部の補充学習「友愛」では、ウェブライブラリーのプリントを活用し、単元の確実な習熟に努めた。 ・中学生は、「友愛」に加え、毎週水曜日、またテスト前、長期休業中の放課後学習会で、基礎基本学習に力を入れてきた。	・学力状況調査では、県平均を大幅に上回ってはいいるものの、題意を正確に読み取ったり、条件を満たして、用語をきちんと使い適切に書くことができていないことが多かった。今後、既習の学習内容を知識として使いこなし、確実に問題を解決していく力をつけていくための、応用・発展問題にも力を入れていく。
		思考力を伸ばす授業力の向上(言語活動の充実)	・職員の言語活動の充実や思考力を深める手だてをとることができているという評価指数を85%以上にする。	・小学部で2つ、中学部で2つの全体授業研を行い、論理的思考力を伸ばす授業法の研究を進める。 ・北山校授業モデルの「考える」「深める」段階での、児童生徒の思考の可視化をし、その変容を把握し評価することで、思考力向上に生かす。 ・全体授業研究会では、指導主事等の講師を招き、職員の授業力向上に活かす。	A	・校内研究は、東部教育事務所から講師を招き、小・中全職員で授業を見て議論を重ね、11月13日には研究発表会を開催し、県内外の先生方に参会いただいた。 ・教職員アンケートでは、100%の職員が指導を工夫したと答えており。児童生徒アンケートでは92%が思考力の向上を実感している。 ・全職員で北山校授業モデルを共通理解した上で授業に取り組み、児童生徒もめあてを達成するために見通しをもって学習に取り組んでいた。	・さらに思考力をのばすため、「指導過程の掲示カード」(めあて～まとめ)と 「思考要素の6項目掲示カード」(比較・順序・種別・理由付け・定義付け・推理)をより効果的に活用し、考えを説明したり表現したりする活動を数多く仕組んだ授業づくりに取り組む。 ・子どもの思考を高める手立てとして思考ツールを取り入れたワークシートを活用していく。
		家庭学習の充実 (自学ノートの活用)	・家庭において、決まった場所、決まった時間に学習する児童生徒の割合を80%以上にする。また、家庭学習時間の平均が、各学年の目標時間を超えるようにする。	・改訂した「家庭学習の手引き」を各家庭に配布し、その利用法及び自学ノートの書き方の周知を行い、家庭と連携して家庭学習の充実を図る。 ・毎日の家庭学習の見通しを立て、「手引き」に沿って家庭学習を進め、学年の目標時間まで自主的に学習させる。 ・児童生徒及び保護者を対象として、定期的に家庭学習状況について調査を行い、実態に応じて学級・個別の指導を行う。	A	・4月の学級開きで「学習の手引き」を使い、児童生徒に向けてオリエンテーションを行った。保護者に向けても、家庭訪問や学級懇談会などで、自学ノートの重要性を啓発した。 ・学習の手引きの活用率が上がり、自学ノートの有効性を感じている児童生徒が増えている。自分で自分を伸ばす力がついたと感じている児童の割合は80.8%だった。 ・家庭学習状況を定期的に調査し、状況を把握し、その推移をみている。また、調査結果を随時全職員で共通認識し、取り組みの継続を図った。	・今後も保護者に家庭学習の大切さを周知し、家庭における具体的指導についても話をしていく。 ・全児童生徒のほとんどが、毎日自学ノートを提出し、自主的な家庭学習に取り組むことができているので継続していく。 ・家庭における自学ノートの取り組みは定着化してきたが、発達段階に応じたものになっていない場合もある。質の高い家庭学習ができるように、一人ひとりの児童への声かけを複数の教師で行っていく。
	●ICT利活用教育の推進	教職員のICTリテラシーの向上	・ICT機器を活用した授業を推進	・ICT支援員が来校するときは、電子黒板の有効な粥用法やデジタルコンテンツの活用法など職員への研修会を実施し、ICT利活用の技能を高める。 ・全体授業研究会で、ICT利活用の提案授業をし、効果的なICT利活用の授業方法の研究を行う。	A	・ICT支援員と連携して、電子黒板やデジタルコンテンツを活用した授業作りに取り組んだ。また、長期休業を利用して職員研修を行い、ICT利活用の技能やネットモラルの知識を高めた。 ・授業研究会でもICTを効果的に活用する場面を取り入れた授業を提案することができた。	・今後もICTを活用し、児童生徒が興味関心や思考力を高めることができる指導法を研究していく。 ・職員研修などを充実させ、新しいコンテンツやICT教材などに対応できるようにICT支援員と連携して技能を高める。 ・今後も授業研究会を通してICT機器を活用した授業を研究する。

	○読書指導	読書活動の推進	・前期児童は年間100冊、中期児童生徒は70冊、後期生徒は50冊以上の読破をめざす。前年度以上の貸出冊数にする。	・朝読書を推進する。 ・月１回ゲストティーチャーを呼び、読み語りを行う。 ・図書館便りを月１回発行し、読書の啓発を図る。 ・児童生徒会の文化委員会とタイアップし、「子ども読書の日」「図書館祭り」「読書交流」「お勧めの本の紹介」等の活動の内容を充実させ、子どもたちが図書館に来やすいようにする。 ・各教室に学級文庫として２０冊本を常備し、毎月入れ替え、気軽に読書ができる環境を作る。学級文庫の活用を呼びかける。	A	・小学部は週一回朝読書の時間を設定し、中学部は朝読書と朝自習を二週間ずつ交互に行い、小・中学部ともに読み聞かせを月に一度行った。読書に親しむという点で効果的であった。 ・文化委員会とタイアップした「図書館祭り」や「読書交流」「お勧めの本の紹介」などの活動は大変充実していたといえる。 ・子どもたちの読書意欲は向上しており、12月までの貸出冊数は前期児童186冊、中期児童107冊と、現時点で目標冊数を大幅に上回っている。後期生徒の貸出し冊数は37冊であり、今後さらに読書の重要性と学校図書館の活用を働きかけ、読書の推進をしていくことが必要である。	・朝読書で読む本を学校図書館で借りて読むというシステムを進めることで、学校図書館の貸出数増加と朝読書の充実の両方を実現していく ・今後も読み語りを継続し、さらに充実させていく。 ・図書館便りを継続し、文化委員に紹介させたり、掲示をするなど読書の啓発に力を入れる。 ・文化委員会の活動を計画的にさらに工夫を凝らしたものにしていくことで図書館の活動をさらに充実させ、子どもたちにとって魅力ある学校図書館を目指す。 ・学級文庫のシステムは今後も継続し、授業担当者の要望を取り入れさらに充実させる。

③地域連携　・ふるさとへの誇り　コミュニティセンター機能

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策
学校運営	○地域との連携	地域連携活動の推進	地域と連携した活動「北山ふれあい企画」の満足度の割合を90%以上にする。	・「北山ふれあいサマーキャンプ」「ふれあい冬の北山まつり」の内容を検討し、より充実感を味わえる企画とする。 ・地域連携活動についてふれあい通信やブログ等で情報発信していく。	A	・「ふれあい冬の北山まつり」についての内容について、企画部で協議・検討を行い、充実した活動になった。 ・ふれあい企画の成果に関しては、保護者は「満足」「ほぼ満足」が98.4%、児童・生徒が96.7%と高かった。	・様々な行事を通して、保護者・地域・学校でコミュニケーションをとり、連携を深めていく。 ・今後，北山の教育を一緒に考えていく組織を作り，地域の教育力を活かしたり、地域のニーズを反映させた活動内容にしていく。
	○小中一貫教育	小中一貫教育の推進	・小中一貫教育のよさを実感する教職員・保護者の割合を90%以上にする。	・小中一貫教育の成果と課題を確認する場を設定する。 ・小中一貫校ならではの教育活動を充実させ、教育効果を上げる。 ・他校の情報を収集し、教育活動の改善を図る。	A	・「小中一貫教育のよさ」について、児童生徒、保護者、教職員の平均はそれぞれ91.8%、89.3%、91.8%で、アンケートの19項目中最も高く、90%以上を達成した。ともに満足度は高い。中学部による小学部へのお世話、学校をリードする中学部の姿勢など、児童生徒の学校生活によい影響を与えている。 ・北山校ならではの小中一貫教育を生かした校内研究実践の一端を公開し、100名近い参会者に来校していただいた。次年度の方向性について示唆していただいた。 ・一般的な小中学校両方の行事等を開催しどちらにも教職員や児童生徒が参加するなど、時間や労力がかかることがある。いかにスクラップ＆ビルドし負担を増やさずチーム力を高めていくことが課題である。	・今年度の反省を全教職員が記載し次年度の教育課程の編成に十分に生かす。特に行事への参加形態や開催方法については、確実に次年度の担当者に申し送りをする。 ・ブロック別、学部別、全校、とそれぞれリーダーとなる教職員を中心に短時間で充実した会議を行い、教育実践ができるよう計画する。
	○危機管理体制	危機管理意識の高揚	・危機管理マニュアルの共通理解を図り、児童の安全確保を確実に行う。 ・校内外の危険個所を知らせ、児童の安全に関する意識を高める。	・危機管理マニュアルの内容を全職員で確認し、あらゆる危機の場面でも、児童の安全を確保できる行動が取れるようにする。 ・危機を想定した避難対応訓練を計画的に実施する。（火災、不審者、地震） ・施設設備の定期的な安全点検を行い、危険を伴う場合は迅速に対応する。	A	・避難訓練では指導が徹底し、安全な避難場所へスムーズに避難することができた。消防署や警察署の方々に指導していただき、火災、地震等の災害に対して、「自分の命は自分で守る」といった意識が高まった。 ・安全点検の方法を改善し確実に行ったことや、安全指導を充実させたことで大きなけががなかった。教職員の安全指導についての評価が76.5%から89%に向上した。 ・児童生徒の発達段階に応じて安全指導をいかに徹底するか次年度の課題である。	・組織として迅速かつ的確に動けるように危機管理マニュアルの見直しを図り、職員研修で活用する。 ・日頃から、児童生徒が危険回避ができるように、各学年、ブロックでの安全指導を強化する。 ・安全マップを育友会役員会や地区懇談会などで活用し事故防止の意識を高める。

教育活動	○総合的な学習の時間	北山地区における諸課題の発見・追究を通して、ふるさとに誇りをもち、生き生きと活動する児童生徒の育成	・「ふるさと北山」について学び、ふるさとのよさを意識する児童生徒の割合を3.8以上にする。（中後期アンケート実施）	・「総合的な学習の時間」の全体計画に沿って、地域の人材活用や地域との連携を通して、「ふるさと北山」についてより身近に感じることができる取り組みを行う。	B	・各ブロックごとの計画に沿って活動することができた。また、中後期ブロック合同での発表会を行うことができた。 ・年間計画にそって、地域とも連携しながら学習を進めることができた。 ・「ふるさと北山」の学習をして、北山のよさに気づいた児童生徒の割合は3.24で、昨年度の3.75よりも下がっている。	・2学年合同、3学年合同のカリキュラムなのでメリットも多かったが、時間確保が難しいところもあるので、次年度のカリキュラムを早く検討する必要がある。 ・地域の人材や地域との連携を通して、児童生徒が主体的に取り組んだと感じることができるような取り組みを行う必要がある。
特定課題	○幼保小中連携	北部保育園との相互理解	・北部保育園の保育・教育内容について意見交換の機会を3回設定する。 ・授業交流を年2回以上行う。	・保育園職員との情報交換の場を確保し、小学校へのスムーズな移行につなげる。 ・授業参観や保育参観で交流を行い、主な活動内容の把握し、小学校の指導内容に生かしていく。	B	・5月と2月の2回富士町内幼保小連絡会議、4月北山校参観、7月保育園参観と保育実習（9年生）、12月1年生保育園訪問、2月年長児学校体験を行った。田植え前の泥遊び、体育大会での年長児のダンス披露は雨天のため中止となった。	・今年度、雨天のため、児童園児の交流が中止になり、再度の日程調整ができなかった。またこれ以上増やすと授業時数や移動等厳しい状況である。「スクールコンサート」「文化発表会」等、学校・育友会・地域の共催行事等を活用し、お互い案内をしあいながら、負担を軽減しつつ交流していきたい。

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策
	●小学校低学年の学習環境の改善充実	低学年児童の基本的な生活習慣・学習習慣の育成	・90%以上の児童に「あいさつや返事」「話をしている人を見て聞く、相手を見てはっきり話す」「整理整頓」「忘れ物をしない」など基本的な生活習慣や学習習慣を身につけさせる。	・学級だけでなく集会などあらゆる場面で、あいさつや返事、聞く・話す時の態度を全職員で指導する。 ・学級通信や懇談会で学級の様子を伝え、保護者への協力をお願いする。	A	・学級指導だけでなく集会や縦割り班活動等の場面で全職員で基本的な生活習慣や態度についての指導を行ってきた。 ・学習活動の中でのスピーチは、順序を表す言葉を使いながら、自分の考えを話すことができるようになってきた。聞く態度についても立腰を意識しながら話を聞こうとしている。 ・忘れ物については、時間割への明記と連絡帳への記入等で児童に忘れ物をしないように意識させた。また保護者にも学級通信等で協力をお願いしながら取り組んできた。	・引き続き、全校であいさつ・返事の定着に向けて取り組んでいく。また、地域の方に対しても進んで挨拶ができるように機会を見つけて全職員で声かけ・指導をしていく。 ・聞く時は、立腰をしながら、体全体「目・耳・心」を使って話を聴くことを意識させる。 ・子どもたちの様子を学級通信や懇談会等で伝えながら保護者の協力を得ていく。
	○特別支援教育	個に応じた支援体制の確立	・特別支援教育コーディネーターを中心に，生徒指導担当者と教育相談担当者，関係機関と連携を図り、幅広く支援活動を行い，職員が特別支援教育の充実を図る取り組みについて「よくできた」「だいたいできた」の割合を90%以上にする。	・全ての児童生徒について個別の指導計画を作成し、それを素に共通理解を図り、支援活動を行う。 ・佐賀県スクールカウンセラーによる授業実践及び職員研修の開催、また学校生活支援事業における巡回相談員を招聘しての研修会を計画する。 ・生徒指導、教育相談との連携を図り、子ども支援会議を介して全職員で情報交換を行う。	A	・支援を必要とするすべての児童･生徒に対して、個別の教育支援計画を作成し、個に応じた支援を行った。 ・スクールカウンセラーによる授業、教育センター生徒指導担当指導主事を招聘しての職員研修の開催、また学校生活支援事業における巡回相談員を招聘しての研修会を行った。 ・気になる（困り感のある）児童・生徒への対応、接し方について研修したことをもとに、職員の100%が「よくできた」「だたいよくできた」と回答している。（23%が「よくできた」77%が「だいたいできた」）	・生徒指導，教育相談との連携をさらに深める。 ・毎月実施している子ども支援会議だけでなく，教務センターでの日常の会話でも情報交換ができる雰囲気をつくる。 ・巡回相談や専門家による研修会で，特別支援に関する理解を深める。 ・自閉症に関する研修を行い、理解を深める。
	●健康・体力つくり	健康な体づくり	・健康診断の治療票の回収率を20%以上にする。（歯科については30%以上） ・感染症罹患者（インフルエンザ等）を昨年度よりも減少させる ・保健体育の授業が楽しいと言える児童生徒を3.6以上にする。（中後期アンケート実施）	・保健だよりを毎月発行して呼びかける。また、掲示板の活用や、集団指導及び個別指導を行う。 ・健康観察を徹底し、手洗い・うがい、換気等の呼びかけや環境衛生の改善に努める。 ・合同体育により、団体競技等を積極的に取り入れ、異学年での交流を行う。	A	・健康診断後、速やかに事後措置を行った。その結果、治療票の回収率が21.0％になった。（歯科40.0%） ・感染症の流行期には、適宜、保健指導を行った。出停者数（1/15現在で比較）は3割減少したが、今後インフルエンザの発生状況により昨年度を上回る可能性もある。 ・アンケート結果から、保健体育の授業が楽しいと言える児童生徒の割合は92.5%であった。（中後期）	・健康の記録などを活用し、機会あるごとに保護者に児童生徒の健康状態を伝えていく。また、インフルエンザ等の感染症の予防・拡大防止のため、環境整備や保健指導を今後も徹底していく。 ・合同体育については、計画的に時間の確保ができるように年度当初に教務部と時間割の調整を行う。

4　本年度のまとめ　・　次年度の取組

①絆づくり・・・国内外の学校との直接またはテレビ会議による交流学習は有意義で、自己表現する力、対話する力、共感する力が身についた。一方、あいさつや言葉遣い、温かい思いやりのある集団作りにはやや課題が残った。
②学力向上・・・調査結果分析や個人カルテ、補充学習会（友愛）、自学ノートなどの取組により、全学年、全教科で県や全国の平均を上回る結果となっている。また、校内研究の成果により思考力を伸ばす授業の工夫改善も進んでいる。また、今年度は立腰を導入したことにより、姿勢よく集中して学習する児童生徒が増加した。
③地域連携・・・小中一貫教育のよさを感じている児童生徒、教職員、保護者の割合は全アンケート項目の中でも最も高く、満足度が高い。地域連携活動においても、北山校ならではのさまざまな特色ある活動が地域・保護者・学校の連携により開催できた。
　次年度は、今年度の取組の中で成果のあったものには継続して取り組み、特に課題として残った人権･同和教育や道徳教育の充実を小中一貫教育の中で図っていく。

●は共通評価項目、○は独自評価項目